

日本語の等位節と情報構造*

岸本秀樹
神戸大学

1. はじめに

日本語には、名詞句や後置詞句などを並列に並べ等位構造を作ることができる要素がいくつか存在する（「か」「や」「と」「も」「なり」など）。本論では、特に、「か」を用いて作られる日本語の等位節 (1a)および(1b)をとりあげる。

- (1) a. [ジョンが走ったか] [メアリーが転んだか]だ。
b. [ジョンが走りか] [メアリーが転びか]した。

この二つのタイプは、表面上、異なる位置に等位接続詞が現れる。(1a)では、「か」が時制辞の右側に現れるのに対して、(1b)では、動詞の右側に「か」に現れる¹。そうすると、見た目は、(1a)はTPの等位接続、(1b)はVP(あるいはvP)の等位接続をしているように見える。しかし、本論ではこれらの二つの等位節は、同じ構造をもち、TPを等位接続することによって形成される等位節であることを示す。

2. 日本語の節構造と相関接続詞節の等位節としての特徴

「か」による等位接続が命題内容を表すTPレベルで起こることを示す議論に入る前に、日本語の節構造について少し概観すると、野田(1995)、南(1974, 1993)などでしばしば議論されているように、日本語には命題を表す部分の周辺構造がかなり豊富である。南(1974, 1993)は、描叙段階(A類)、判断段階(B類)、提出段階(C類)、表出段階(D類)の4段階の階層が存在することを示唆し、野田(1995)は、(2)のような階層が存在することを示唆している。

- (2) かけ—られ—てい—なかつ—た—みたいだ—ね
語幹-ボイス-アスペクト-否定-テンス-ムード(事態)-ムード(聞き手) 野田(1995)

TPの上位にさまざまな投射が存在するという事は、日本語に限られるわけではない。

* 本稿は、2012年1月28日に神戸大学で開催された「言語学ワークショップ」(神戸外語大学言語科学研究センター(CLS)主催)において発表した内容の一部である。その際、内容に関して、遠藤喜雄、高野祐二、佐野まさき、由本陽子、依田悠介の各氏から貴重なコメントをいただいた。ここに謝意を表しておきたい。

¹ 動詞に「か」が付加されるタイプの(1b)の等位節においては、見た目と実際の構造がずれることになる。本論では、(1b)のタイプの等位節については、便宜上、実際の構造を示す必要のない場合においては、見た目の構造に基づく括弧付けをおこなうことにする。

Rizzi (1997, 2004)では、イタリア語のデータから、ForceP-TopP*-FocP-TopP*-FinPのようなTP上位の構造が仮定されている(Cinque 1999, Endo 2006なども参照)。

TPの上位にどれくらいの投射が必要であるかについては、本論では詳しく議論しないが、日本語においては、TPの上位に存在する投射として、少なくとも、発話に関するモダリティの投射(C-modal(=Communicative modal)として表す)と話者の判断を表すモダリティの投射(J-modal(=Judgmental modal)として表す)が存在すると仮定しておいてよいと思われる(Narrog 2009などを参照)。

(3) [C-modal [J-modal [TP]]]

発話に関するモダリティの階層では、例えば、「よ」や「ね」などの小辞が現れる階層で、南のD-段階の要素に相当するものが現れる。判断に関するモダリティの階層には、「だろう」「だ」のような話者の判断を示すものが現れる。これは、南のC-類の段階の要素に相当するものである。本論で示すことは、テンスの右側に現れる要素が等位節内に現れないということで、J-modalとC-modalの中に入るC類およびD類の要素は、本論で議論する等位節に含まれないということである。

次に、等位構造の一般的な特徴について考えると、等位構造は、基本的に同じ範疇に属する要素が複数並列にならべられるという特徴を有する(The rule of coordination of likes)。統語的な特徴として、等位節は、移動に関しては島を形成し(The coordinate structure constraint)、等位節の内部からの抜き出しは一般にできない。しかし、ATB移動(Across-the-board movement)が関与する場合には抜き出しが可能であることが知られている(Williams 1978)。

本論で考察する等位節もやはり統語的な抜き出しに関しては島を形成するが、ATB移動が関与する抜き出しならば可能であるという、等位節に特有の特徴が観察される。ここで具体的に等位節からの抜き出しに関する例を観察すると、まず、(4)と(5)は二つのタイプの等位節構文において、右側の等位節からも左側の等位節からも要素の抜き出しができないことを示している。

- (4) a. *公園へは (おそらく)[ジョンが行くか][メアリーが学校へ行くか]だ。
 b. *学校へは [ジョンが公園へ行くか][メアリーが行くか]だ。

- (5) a. *公園へは (おそらく)[ジョンが行きか][メアリーが学校へ行きか]する。
 b. *学校へは [ジョンが公園へ行きか][メアリーが行きか]する。

次に、(6)の例は、二つの節から同時にATB移動によって要素が抜き出される場合には、抜き出しが容認されるということを示している。

- (6) a. 公園へは (おそらく)[ジョンが行くか][メアリーが行くか]だ。
 b. 公園へは (おそらく)[ジョンが行きか][メアリーが行きか]する。

これらの事実は、一般に等位構造からの抜き出しにおいて一般的に観察される特徴であることから、「か」を用いて並列される節が(従属節として機能するのではなく)等位節構造を持っているということが言えるであろう。

3. 「か」が時制辞の右側に現れる相関等位節

相関接続詞として用いられる「か」が時制辞の右側に現れる(7)のような文の場合には、見た目からも、時制辞句(TP)を等位接続していることが推測できる。

(7) [ジョンが公園へ行くか][メアリーが学校へ行くか]だ。

実際、このタイプの構文 ((7)のような例) で TP が等位接続していることは、統語的な分布からも確認できる²。

具体的な例を観察すると、(7)のタイプの等位節では、時制辞の右側に現れる助動詞類は、(8)の「だろう」の例で示されているように、等位節の外（右側の等位節のさらに右側）に現れなければならない。

- (8) a. [ジョンが走るか][メアリーが走るか]だろう。
b. *[ジョンが走るだろうか][メアリーが走るだろうか]だ。

さらに、(9)の例からわかるように、「みたいだ」も等位節の外側にしか現れることができない表現である。

- (9) a. *[ジョンが走ったみたいだか][メアリーが走ったみたいだか]だ。
b. [ジョンが走ったか][メアリーが走ったか]みたいだ。

「だろう」や「みたいだ」のような助動詞類と同様の分布は、「です」「ます」のような丁寧表現についても観察される。(10)で示されているように、「です」「ます」のような表現は等位節の外側に現れなければならない。

- (10) a. [ジョンが走るか][メアリーが走るか]{です/であります}。
b. *[ジョンが走りますか][メアリーが走りますか]{です/だ}。

なお、丁寧表現は等位節の外側に現れるが、主語尊敬語化をする表現は等位節内に現れてもよい。

(11) [鈴木先生が{お走りになる/走られる}か][山田先生が{お走りになる/走られる}か]だ。

また、主節にしか現れないような「ね」「よ」のような助詞は等位節外に現れ、等位節内では生起が許されない。

- (12) a. ジョンが走るね/よ。
b. [ジョンが走るか]メアリーが走るか]だね/よ。
c. *[ジョンが走るね/よか][メアリーが走るね/よ]かだ。

² (7)のような例において文末に挿入されるコピュラは、文が動詞や形容詞で終わらない場合に挿入される要素であると考えておく。

これらの事実が示していることは、命題領域(TP)の外側に属する主要部要素が等位節内に現れることができないということである。ここで見た要素の分布は、(7)のタイプの等位構造では、TPの等位接続が関与していることを示唆している。

次に、節の左側周辺部に現れる要素について検討することにする。この位置に現れる要素は、一般に句を形成する要素であり、日本語では多くの場合、かき混ぜをすることができる。したがって、これらの要素が現れる順序を見ただけでは、その構造を決めることができない。しかしながら、等位節内にどのようなタイプの要素が現れるかを見ることによってその構造を確かめることができる。

TPを等位接続する(7)の等位節の構造は、副詞の現れ方に反映される。まず、(13a)のように、主語指向性を持つ副詞は、等位節内に現れることができる。

- (13) a. [ジョンが一生懸命走るか][メアリーが熱心に応援するか]だ。
b. 一生懸命[ジョンが走るか][メアリーが応援するか]だ。

さらに、(13b)のように、ATB移動によって節外に生起させることも可能である。同様の現象は、時間副詞に関しても観察される。

- (14) a. [ジョンが明日走るか][メアリーが今日走るか]だ。
b. 明日 [ジョンが走るか][メアリーが走るか]だ。

これらの副詞類は、もともとTP内において認可されると考えられる要素なので、等位節内に生起することは容易に予想される。

これに対して、モーダルの意味を表す副詞は、(15)で示されるように、等位節内ではなく等位節外に現れなければならない。

- (15) a. *[ジョンがおそらく走るか][メアリーがたぶん走るか]だ。
b. おそらく/たぶん [ジョンが走るか][メアリーが走るか]だ。

話者の判断を示す話者指向副詞も同様に、(16)のように、等位節外に現れなければならない要素である。

- (16) a. *[ジョンが実のところ走るか][メアリーが正直言って走るか]だ。
b. 実のところ/正直言って [ジョンが走るか][メアリーが走るか]だ。

次に、「は」でマークされる題目についてみると、題目も等位節内では許されず、等位節の外に現れることが要求されることは、(17)のような例から確認できる。

- (17) a. *[ジョンは走るか][メアリーは転ぶか]だ。
b. ジョンは [走ったか][転んだか]だ。

これと同じ事実も、「なら」でマークされた要素にも観察される。

うことである⁵。

ここで見ている日本語の二つの「か」が用いられる相関接続詞は、英語の *either...or...* や *both...and...* のような表現に相当する。英語の場合、*and* や *or* は等位節を形作る接続詞として機能するが、*either* や *both* は副詞として機能する。したがって、(20)のように、後者の要素の現れる位置は比較的自由である(Larson 1985, Schwarz 1999 参照)。

- (20) a. [He both overslept] [and his bus was late].
b. We must prevent rapid changes [in either the mixed liquor] [or in the effluent].
c. either my [cheek] or [cheerfulness] (Huddleston and Pullum 2002)

日本語の場合は、同じ「か」が用いられるが、(21)の省略の可能性から判断して、後方の節に現れる一方の「か」は副詞表現であると考えてよいであろう。

- (21) a. ジョンかメアリー(か)
b. (Either) John or Mary

そうすると、(19a)のような等位節では、TP の等位接続が起こるため、前方節でも TP の構造をもつはずである。しかしながら後方節において「か」が動詞に付加された位置に現れるため、前方節においては、義務的な省略が適用され、表面上は動詞句を等位接続したように見えるということになる。

実際に、(19a) の等位節の構造として、(19b)のような TP の等位接続されていることを確かめるために、前節でもみた副詞の生起に関する分布を見てみることにする。以下でも見るように、この分布は、基本的に「か」が時制の右側に現れる場合と同じである。まず、時間副詞は、等位節内に現れることができるが、ATB 移動によって節外に生起させることも可能である。

- (22) a. 昨日[ジョンが走りか][メアリーが走りか]した。
b. [ジョンが昨日走りか][メアリーが一昨日走りか]した。

主語指向性を持つ副詞も同じ分布を示す。

- (23) a. [ジョンが一生懸命に走りか][メアリーが一生懸命に走りか]した。
b. 一生懸命に[ジョンが走りか][メアリーが走りか]した。

次に、モーダルの意味を表す副詞は、等位節内に生起させることはできず、等位節外に現れる必要がある。

- (24) a. *[ジョンがたぶん走りか][メアリーがたぶん走りか]した。

⁵ このタイプの構文でまず注意しなければならないことは、相関接続詞が付く最初の節では、「か」の右側の要素を表出することができないということである。

(i) a. *[ジョンが走りかし][メアリーが転びか]した。

b. *[ジョンが走りかして][メアリーが転びか]した。

これは、動詞よりも上位にある要素が義務的に削除されるためであるということである。

b. たぶん/むしろ [ジョンが走りか][メアリーが走りか]した。

話者の判断を表す副詞も、モーダルの副詞と同じ分布を示す。

(25) a. *[ジョンが実のところ走りか][メアリーが正直言って走りか]するでしょう。

b. 実のところ [ジョンが走りか][メアリーが走りか]するでしょう。

さらに、題目や話者にとって既知の情報を表す「なら」が付加した名詞句は、(26)で示されるように、等位節の内部に現れることができない。

(26) a. *[ジョン{は/なら}走りか][メアリー{は/なら}転びか]した。

b. ジョン{は/なら} [走りか][転びか]した。

このような事実はすべて、「か」が時制辞の右側に現れる場合と全く同じであり、動詞の右側に「か」が現れても等位節の構造は、「か」が時制辞の右側にある時と同じであるということを示唆している。

(7)のタイプの等位節が TP の等位接続をしているという事実をさらに裏付けるために、否定の解釈について考えることにする。(27)のような二つの文では、「か」と「ない」の相対的なスコープが同じである。

(27) a. [ジョンが走らなかったか][メアリーが走らなかったか]だ。{ $\neg A \vee \neg B$, $*\neg(A \vee B)$ }

b. [ジョンが走りか][メアリーが走りか]しなかった。{ $\neg A \vee \neg B$, $*\neg(A \vee B)$ }

(27a)の文は、「か」が時制の右側に現れており、否定よりも構造的に上位にあると考えられる。実際、(27a)で得られる解釈は、ジョンが走らなかったかメアリーが走らなかったかのいずれかが成り立つ時に命題が真となるということで、これは、否定の節が二つ等位接続された、 $\neg A \vee \neg B$ のような論理式で表される意味をもつ。これに対して、(27b)の場合は、見た目には、「か」よりも否定が構造上上位にあるように見えるが、意味の解釈としては、(27a)と同じ、 $\neg A \vee \neg B$ ということになる。つまり、ジョンが走らなかったかメアリーが走らなかったかのいずれかが成り立つ場合に、命題が真となるのである。

なお、「ない」が「か」よりも構造的に上位にある場合に得られる解釈は、 $\neg(A \vee B)$ となるが、これは、(28)のような文で得られる解釈である。

(28) [ジョンが走ったか][メアリーが走ったか]で(は)ない。

(28)では、ジョンが走ったこととメアリーが走ったことのいずれかが起こったのではないという意味を表す。つまり、「ジョンもメアリーも走らなかった」あるいは「ジョンもメアリーも走った」のどちらか一方が成立すれば、命題が真となるのである。(28)とは異なり、(27b)においては、否定が「か」よりも構造的に下位にある場合の解釈が得られる。したがって、(27b)の否定の解釈に関する事実は、(27b)も(27a)のように否定を含む TP が二つ等位接続詞で結ばれた構造を持っていることを示唆している⁶。

⁶ これと似た事実の観察は、Johannessen (2005)に見られる。

5. 主語の位置と部分削除

前節で示したように、(29)の等位節のように「か」が動詞の右側に起こる場合には、前方の節の動詞部分が後方の節の同等の部分と同じ関係を持つために、その要素の部分削除が起こる。

(29) [ジョンが走りか][メアリーが転びか]した。

表面上の形式では、「か」がVP(あるいはvP)を等位接続するように見るので、(29)の節においては、主語がもともと基底で生成されるVP(あるいはvP)内に現れているようにも思えるが、実際には、主語はTP内部に存在すればよいので、意味役割を与えられる動詞句の中に入っている必要は全くない。

このことを示す前に、まず、(29)のような等位節において、述語要素の部分削除が起こるということを別の例で示すことにする。等位節の部分削除の存在は、次のような文を比較するとはっきりするであろう。

- (30) a. [ジョンが暴徒に殴られか][メアリーが聴衆に殴られか]した。
b. ?[ジョンが暴徒に殴りか][メアリーが聴衆に殴りか]された。

(30b)の前方節は、(30a)と同じように、受身の意味を持つと解釈できる⁷。ここで重要なのは、前方節において、受身の「られ」が表面上現れないのに、受身の格配列が可能であるということで、前方節でも受身要素が隠れていると考えられる。このタイプの解釈は(31)では得られない。

- (31) a. *[ジョンが暴漢に{殴り/殴って}[メアリーが聴衆に殴られた]。
b. [ジョンが暴漢を殴って][メアリーが聴衆に殴られた]。

(31a)の前方節においては、意図する受身の意味が表されず、さらに、受身の格配列も許されないため、容認されない。(31b)のように、能動の意味を表すならば容認される。これは、(31)のタイプの等位節では、受身を表す動詞部分に対する部分削除が適用されず、前方節と後方の(時制を除く)動詞連鎖が一致させられないからである(つまり、(31)のような節の場合、前方節では時制の部分のみが削除されている)。

同様の部分削除の現象は、受身の場合のみならず、(32)のような使役文において観察される。

- (32) a. [ジョンが弟を走らせか][メアリーが妹を走らせか]するだろう。
b. ?[ジョンが弟を走りか][メアリーが妹を走りか]させるだろう。

⁷ (30b)は、通常ならば省略しない述語要素を削除しているので、ぎこちない文であるかもしれないが、(31a)との文法性の違いは明らかであろう。

(32b)も前方節は、使役文として解釈できる。また、使役文としての項の格配列も許される。これに対して、(33)の前方節では、使役の意味が得られない。

(33) *[ジョンが弟を走り][メアリーが妹を走らせた]。

受身の場合と同様に、(33)の使役文も、動詞連鎖の義務的な部分削除を引き起こすことがないために、前方節と後方節の（時制を除く）動詞連鎖が一致させられないからである。

次に、前方節内に含まれる主語は、見かけ上、それを認可する動詞が存在する必要のないことを見る。このことを端的に示す例は(34)である。

(34) a. [ジョンが論文を長くするか][メアリーが論文を短くするか]だ。
b. [ジョンが論文を長くか][メアリーが論文を短くか]する (べきだ)。

(34)は使役文で、それぞれ節の主語を認可する要素は使役動詞の「する」であるが、見かけ上、この動詞は (34a)では等位節内部、(34b)では等位節外部に存在する。さらに、(35)は、「が-を」の格パターンが「長い」によって認可されないということを示している。

(35) *ジョンが論文を長い。

そうすると、(34b)では、見かけ上は、主語を認可する動詞が節内に存在していないが、実際には節内存在しなければならないということになる。

よく似た事実は、(36)のような文においても観察される。(36)はコントロール節であるため、それぞれの節の主語は「たがる」から意味役割が与えられ認可されるはずである。

(36) a. [弟がおもちゃを買ったか][妹が人形を買ったか]だ。
b. ?[弟がおもちゃを買いか][妹がお人形を買いか]したがったようだ。

しかしながら、(36)で示されているように、「たがる」は見かけ上等位節の内部にあっても外部にあってもかまわない。これに対して、(37)のような例は意図する意味（コントロール節の意味）では容認されない。

(37) *[弟がおもちゃを買いか][妹がお人形を買ったがった]。

このような事実からも、(36b)の等位節では、主語を認可する動詞が発音がされなくても構造上どちらの等位節の中に存在しなければならないということがわかる。

ここで重要な点は、述語部分の部分的な空所化(partial gapping)が関与しているため、(29)の等位節は見た目ではTPを等位する構造を持っていないということである。さらに、通常の述語の省略においても、等位節内には表面上省略された述語が現れないことは、(37)のような例から明らかであろう。

(37) [ジョンが論文を長く ϕ]そして[メアリーが論文を短くした]。

省略が起こった場合(37)の前方節では、述語は音声形式上出現しないが、それでも、主語や

格配列は、述語が存在する場合に認可される形のものになるので、動詞は構造上存在していなければならない。

要するに、(29)のタイプの等位節構文は、見た目と同じように VP (or vP)の等位接続をしているなら、主語は vP 内に存在していなければならないように見えるかもしれない。しかしながら、実際には、この構文では TP の等位接続が起こっているのだから、主語は TP 内であれば、部分的な空所化が起こる(29)のような等位節内において現れることが許されるということである。

6. まとめ

本論では、「か」が時制辞の右側に現れる等位節と、動詞の右側に「か」に接続される等位節について考察をした。副詞などの要素の分布より、二つのタイプの等位節が、ともに TP を等位接続するというを示した。より具体的には、(38a)のタイプの等位節は、(38b)のように TP が並列される構造をもつ。

- (38) a. [ジョンが走るか][メアリーが走るか]だ。
b. [[TP か][TP か] だ]

(39a)のタイプの等位節も、TP が並列される構造をもつが、並列された二つ目の節の「か」が動詞に付加されているため、一つ目の節において、部分削除が起こる。

- (39) a. [ジョンが走りか][メアリーが転びか]しなかった。
b. [[TP Vv-Neg-T-か][TP Vv-かしなかった]]

(39a)においては、TP が等位接続された(39b)のような構造をもつが、音声形式で述語要素の平行性を保つために、述語要素に対して、部分削除は義務的に起こる。そのために、表面上は、あたかも動詞句が等位接続されているように見える。しかし、(39a)のような文が、実際には、TP が等位接続された構造を持っているということは、いくつかの経験的な事実から確かめることができる。

参考文献

- Cinque, Guglielmo (1999). *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. New York: Oxford University Press.
- Endo, Yoshio (2007). *Locality and Information Structure: A Cartographic Approach to Japanese*. Amsterdam: John Benjamins.
- Huddleston, Rodney, and Geoffrey Pullum (2002). *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Johannessen, Janne Bondi (2005). "The syntax of correlative adverbs." *Lingua* 115, 419–443.
- Kishimoto, Hideki (2009). "Topic prominence in Japanese." *The Linguistic Review* 26, 465-512.
- Larson, Richard (1985). "On the syntax of disjunction scope." *Natural Language and Linguistic Theory* 3, 217-264.

- 南不二男 (1974). 『現代日本語の構造』 大修館書店.
- 南不二男(1993). 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店.
- Munn, Alan (1993). *Topics in the Syntax and Semantics of Coordinate Structures*. Ph.D dissertation, University of Maryland.
- Narrog, Heiko (2009). *Modality in Japanese: The Layered Structure of the Clause and Hierarchies of Functional Categories*. Amsterdam: John Benjamins.
- 野田尚史 (1995). 「文の階層構造からみた主題ととりたて」 益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編) 『日本語の主題と取り立て』 pp.1-35. くろしお出版.
- Rizzi, Luigi (1997). “The fine structure of the left periphery.” *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*. ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.
- Rizzi, Luigi (2004). “On the cartography of syntactic structures.” *The Structure of CP and IP: The Cartography of Syntactic Structures: Volume 2*. ed. by Luigi Rizzi, 3-15, Oxford University Press, Oxford.
- Ross, John (1967). *Constraints on variables in syntax*. Doctoral dissertation, MIT.
- Schwarz, Bernhard (1999). “On the syntax of *either ...or*.” *Natural Language & Linguistic Theory* 17, 339-370.
- Williams, Edwin (1978). “Across-the-Board Rule Application.” *Linguistic Inquiry* 9, 31-43.
- Yuasa, Etsuyo (2005). *Modularity in Language: Constructional and Categorical Mismatch in Syntax and Semantics*. Berlin: Mouton de Gruyter.